

## 岐阜県の文化振興に係る懇談会（第2回）

【日 時】 平成 18 年 12 月 15 日（金） 16：00 ～ 18：00

【場 所】 県民ふれあい会館会議室

【発言要旨】

### 県が実施している文化施策に対する提案について

- ・美術館や博物館などの文化施設の無料化は、入場者数を増やす観点を別にすると、必ずしも県民に良い影響があるとはいえない。良い芸術や文化を鑑賞するにはお金が必要という意識を根付かせる必要がある。
- ・岐阜市内は文化施設があちこちに点在しすぎ。いくつかを効率的に回れるように集中させるべき。
- ・県美術館の喫茶店やミュージアムショップは、もっと利用されるように変えたほうがいい。
- ・県美術館を中心に開催されている「HIBINO DNA AND・・・」は、今までにない展覧会。こうした発想の転換が必要。
- ・岐阜県は非常に広い。5 圏域あって、伝統文化にそれぞれ特徴がある。こうした古いものを「県全体でひっくるめて」ということは難しい。
- ・イアマス（情報科学芸術大学院大学と国際情報科学芸術アカデミー）の優秀な人材が県外流出するのを止める手立てを講じてほしい。せっかくの素晴らしい人材が出て行ってしまわないのはもったいない。民間企業の採用が難しいなら行政に受け皿をつくってでも対策をとってほしい。
- ・「日本モーツァルト音楽コンクール」の受賞者を、もっと県でバックアップするべき。せっかく県が開催し、岐阜県出身の人が初めて大賞をとったのだから、もっと支援したほうが良い。
- ・学校の特徴を出していくことは、ある意味では正しい。今は、特色化選抜といいながら、中で公平感を求めている。ちぐはぐであり、もう少し明確化したほうがいい。

### 2 文化活動に対する行政の支援のあり方について

- ・「良いものを鑑賞するために名古屋に行く」という流れを変えて、身近な大都市である名古屋の人を呼んでくれるような施設をつくり、催しを開催する。
- ・新潟市がコンテンポラリーバレエをバックアップして、バレエ団を持っている。これは衝撃的。こうした行政の施策（税金の使い方）を批判的に見られることもあるが、自分たちがこの人たちを支援しているということを誇りを持って言えることがうらやましい。
- ・行政の協力で、文化の溜まり場（楽しいストリート）をつくることを考えていきたい。これは市民レベルだけでは何ともならないことだから。

- ・岐阜県は大規模な催しを誘致できる施設がない。そういう大きな施設があることで、大きい催しが招聘でき、その運営に携わる機会ができることから、関係者の間に高いレベルの「支える意識」や「一緒になってつくりあげる意識」が生まれ、関心が高くなる。これは社会人になっても大切なことなのではないか。
- ・やりたいことがやれる教育システムを大事にしたい。特に実業高校では、そういったところを自由裁量というか、指導する先生を大事にする、育てる、そういう仕組みづくりが、結果的には5年後10年後に、いろいろなおもしろい人材が出てくる土壌になる。岐阜県はその視点が希薄。
- ・文化を育てるという上で、プロかアマかということは重要なポイント。プロを目指すにはお金がかかる。日本は、すでに「プロを育てる」段階にきているのではないか。
- ・アマチュアを支援する時期は終わった。プロとして自立できるような支援をしていくことが必要。単に発表の場を与えるというのではダメ。
- ・無理して窓口を広げる必要はない。全員に分かってもらおうというのは、しょせん無理な話。窓口は狭いがそこを努力して踏み込んで行った人が、中へ入ったらとても良い環境が用意されているというものでいいのではないか。
- ・行政が有望な人材を5年とか10年の期間で支援する。大きく伸びると思う。
- ・お金がかかっていることは、やはりすごい。一般市民の盛り上がり巻き込んで、街全体がこちらを向くくらい、すごくお金をかけて実施する。
- ・活動の広がりには、小さな動きを、周り（地域）がどれだけバックアップできるかにかかっている。
- ・規模は小さくても、中身で勝負すべき。大きさではない。
- ・格好いいことが重要。文化や芸術で、格好悪いのはダメ。
- ・学校部活動における、楽器の貸し出しを充実させ、経済的に厳しい生徒のためにも、敷居を低くして、間口を広げることができないか。
- ・文化施策を、行政が総花的にやるのは無理だろう。

### 3 その他

- ・古いものの見直しを徹底するのも一つの方法ではないか。
- ・「教養」というものが、県民の中に広く根付いていくことが文化の豊かさにつながる。
- ・文化とは、発信者と受け取る側の相互作用。岐阜県の中にそういった機会をたくさん設けていくことが必要。
- ・批判については、自分の立ち位置を測ることができるし、理解できるが、無関心が一番痛い。